

この国の医療のかたち

病気になるったら病院で治してもらう。

これまで当然とされてきた医療の姿が、変革のときを迎えている。

超高齢化が進むこれからの医療はどうあるべきなのか。医師だけの問題ではなく、今すべての人が問われている。

急がれる

治療から予防へのシフト

2025年、団塊の世代が75歳の後期高齢者となり、国民医療費は今より25兆円増えて65兆円に達するとされている。現役世代がどれだけ汗を流し働いても、到底まかなえるものではない。いったいどうすればよいのか。

「これまでの医療の考え方を根底から変える必要があります。もっと広い視野で考えて、社会全体で対策していかななくてはならない。そういう時期が来ています」

とは、堺市立病院機構の理事長で、128もの学会を束ねる日本医学会の第七代会長を務める門田守人氏。その言葉の裏には、がん対策の計画策定責任者として経験した忸怩たる思

でがんになる人が減ることが織り込まれていました。ところが、予防面で掲げた目標がことごとく達成できていないのです」

2007年から2015年の間に、成人喫煙率は24.1%から18.2%に減少した。だが、同計画では「2022年に12%まで減少」が目標だ。

また、国はがん検診の受診率を2016年までに50%にすることを目指していた。しかし、現状の受診率は30〜40%台で、これも目標を大きく下回っている。

「この10年、がん拠点病院ができて、高度な医療が普及し、画期的な新薬も登場しました。にもかかわらず、がんの苦しみを減らすという目標は達成に至っていない。予防がいかに重要かを考えさせられました」

医療に携わるものの責任を痛感した門田氏は、第3期基本計画を練る過程で、社会全体で予防に取り組んでいく重要性を強く訴えた。

「がんに限らず、生活習慣で予防できる病気は数多くあります。これだけ分析技術が進んだ現代では、未病の状態での病気の兆候を捉えて、発症を遅らせたり、治癒させることも容易になると思います。今までの医療は個人を見ていました。これからはマス(集団)で見ていく必要があります。マスとしてマスの動きを捉えれば、個人では見えなかったものが見えてくる。『私の健康』から『自分たちの健康』へ。医師も考え方を変えないといけない。もっと歩みを早めるべきです」

人間らしく生き
人間らしく死ぬために

だが、医療のあり方を議論する以前に、もっと根深い問題が横たわっている。門田氏は指摘する。

「たとえば、たばこが健康に良くないという事は、誰もが知っています。ところが受動喫煙を防ごうという取り組みは、遅々として進まない。喫煙は憲法に定められた権利だとまでいう議員もいる。でも、受動喫煙は違います。吸わない人に害を与えている。もはやそんな遅れた国はほとんどありません。明治以来、大学進学率は高まり、生活は豊かになった。その一方で、日本は大切な何かを見失ってしまっている気がしてならないのです」

なぜなのか。長く臨床医として働くなかで、門田氏はひとつ気がついたことがあった。生と死に関して多くの人に誤解があるというのだ。

「どうやら多くの人は、自分が死ぬとは思っていないんです」

「医者にとだけ止められても、たばこを吸い続ける患者さんがいますが、そういう人は自分だけががんにならないと思っっているのです。そんな人でも当然がんになる可能性があるわけで、いざがんだと知った途端、『もうたばこはやめます』と言ってくるんです。他の人は別として自分には死は訪れないという思い込みがある。もちろん生物が死ぬという事は知っていますが、本当に命の危機が迫るまで、それを自分のこととして

考えられていないのです」

その原因を、門田氏は日本の風土に見ている。近代の日本は、極力日常から死を遠ざけてきた歴史や文化があるからだ。考えられる理由はさまざまだが、結果的に我々が身近な日常として死を目にすることはほとんどない。一方キリスト教の国では、子供のころから十字架に磔にされたキリスト像を目にして、死と向き合っている。

「これが理由のすべてではないでしょうが、死生観の違いが、たばこ対策やがん検診にも表れているのではないかと思っています」

現在臨床の現場では、クオリティ・オブ・ライフ(生活の質)を高めることに加えて、最期の時を、とだけ人間らしく、自分らしく迎えるかというクオリティ・オブ・デスの視点が注目されている。しかし、自分はまだまだ大丈夫と、死をリアルに受け止められない人間に、よく生きて、そして、自分なりの生を全うすることの意義をイメージできるはずもない。

「時間はかかるでしょう。でも、やらなければなりません。家庭教育がカギとなるのか、行政でできることがあるのか、それはわかりません。しかし、人が人間らしさを身につけて、人間らしく死を迎えられる社会を、社会全体で作りに上げていくことが、もっとも大事な視点だと思えます」

学者は真実に基づいてこそ

こうした理念のもと、門田氏は、いくつもの直言を発している。



日本医学学会会長 医学博士
門田 守人(もんでん もりと)

1945年広島県生まれ。大阪大学医学部卒業、医学博士。米国メモリアル・スローン・ケタリングがんセンターへ留学後、阪大に戻り、教授、副学長を務めて退任。がん研究会有明病院病院長を経て、現在は堺市立病院機構理事長。2015年9月からは日本臓器移植ネットワーク理事長。日本外科学会や日本癌学会など学術団体の会長や理事長を歴任し、17年6月から日本医学学会会長。

